

**【論文】**

学生のリアクションの効果的な収集と活用  
—大学における授業の質向上のために—

奴 田 原 諭\*

Effective collection and use of student reactions  
—To improve the quality of classes at university—

NUTAHARA, Satoshi

要旨：学生が授業をどの様に捉えているかを授業担当者が把握すること、殊に目標設定が専門科目に比べて複雑にならざるを得ない教養科目でそれは尚更重要なことだ。しかしながら教養科目は一般的に出席者が多く、紙を使用した従来の物理的なコメントの回収は運用そのものに困難を来す。そこで、紙の回収に替わりデータでの回収、さらには「フォーム」を用いてスプレッドシート上に容易に一覧化できる方法を運用してみた。その是非について学生にアンケートを試みたところ、概ね賛同が得られた。回収したコメントは毎回の授業の導入として活用するのだが、データであることにより意外にも学生との距離を縮めるものとなり、また紹介の順番として適切な構成を組むことができた。それにより、15回の授業を出席学生の中で、同時に授業担当者の中で有機的に接続させるものとして機能し、授業改善の一助となることが考えられた。

キーワード：リアクションペーパー 授業改善 教養科目  
アクティブラーニング 初年次教育

---

\*ぬたはら さとし 文教大学文学部日本語日本文学科非常勤講師

## 1. はじめに——教養科目における授業各回の有機的接続

学生は教室での担当教員の話をもどく様に捉えているのか、それを把握することは極めて重要なことだ。その為にリアクションペーパーなどと呼ばれるようなもので学生に授業のコメントを求めたりする。1コマの講義の中で判らなかつたところはどこか、何を面白いと思ったのか、学生のコメントによってそれを把握することが授業の質の向上に繋がることもあるだろう。まさに学生の〈リアクション〉が話し方の変更を促す訳だ。

これは既に多く教育学系の研究者によって紹介されており、「何でも帳」や「ミニッツペーパー」、「一枚ポートフォリオ」など様々な名称で呼ばれているが、「いずれにしても共通しているのは、その記述内容に学生の学びの様子が含まれているということである」<sup>1)</sup>と須田昂宏は指摘する。この「学生の学びの様子」を担当教員が知ることによって「授業内容の精選、教授法の改善や配付資料の準備など、より楽しく、役立つ授業にするための努力と工夫を継続することが出来るようになった」と述懐したのは織田揮準だ<sup>2)</sup>。

ところで、こういった、授業時間内だけでは把握しきれない学生の〈リアクション〉が必要なのは100人を超え、時に500人以上ともなるような授業ではないだろうか。小さな教室とは違い、1コマの中で学生の〈リアクション〉を直接的に受け取ることができないからだ。しかし大教室で行われる授業で、例えば「大福帳」<sup>3)</sup>の様な形式は担当者の負担があまりに大きく、運用そのものが危ぶまれる。単にコメントを集めるだけだとしても毎週ともなれば、その物理的な量も馬鹿にできない。学生の〈リアクション〉を最も確認すべき大教室の授業が、最もそれを行いにくいのだ。

このように、大教室で行われる大人数の授業でこそ行われるべきであるのが学生のコメントの回収なのだが、その中でも少し異なる観点からもう

---

1) 須田 (2017 : P14)

2) 織田 (1991 : P169)

3) 註2) に同じ。

一つ絞ることができるだろう。それはおそらく専門科目と呼ばれるものと対照的に捉えられる、初年次教育として設置されることが多い教養系の科目という点である。

教養教育の重要性については本論末尾で詳述するが、教養系の科目は半期15回の授業のそれぞれを有機的に接続させる工夫が必要となることが多い。専門科目の授業のようにやらねばならないことが明確に決まっている訳でもなく、学生自身の中にも辿り着くべき場所が明瞭な形で捉えられている訳でもない。それは出席者の学部学科が多岐に亘る、非専門の科目であるからだ。自らの専門としない学問領域で明確な到達点を掴むことは極めて難しい。それは必然的に、毎週の各コマ間を繋ぐ必然性という名の糸を見えなくする。15回の授業がバラバラになってしまうのだ。

コメントの回収が最も求められながら同時に最も運用しにくい大人数の授業でそれを行うこと、なおかつそれを、学生の中で15回の授業を有機的に接続するために有効に用いること、これらを両立させるために、コメントをテキストとして回収する方法を提唱したい。もちろんメールを用いる方法ではない。15回の授業の有機的接続を考えた場合、それでは、例えば出席者が300人ほどの授業では担当者の負担が余りに大きく、現実的ではないだろう。そこで、私は「フォーム」<sup>4)</sup>を用いることを試みた。

データとして集められたコメントを授業運営においてどの様に役立たせてゆくのかという問題に関して最終的には述べるが、まずはテキストデータとして回収する方法について紹介、運用に際して学生はそれをどの様に感じたのか、運用事例の紹介とそれに関するアンケート結果を提示することで確認してゆきたい。

---

4) パソコンやスマートフォンにてデータの回収を行うことのできるもの。ブラウザ内で処理することができ、アンケートなどに使用される。回収されたデータはスプレッドシート上に表示することができる。

## 2. 学生コメントの回収方法

教養の授業となると大抵の場合、履修人数が多くなる。個人的な経験で言えば、100人を切ることはまずない。多いときは300人から400人。大規模なところ、あるいは科目によってはもっとずっと多い人数のこともあるだろう。そんな状況で毎回A5サイズの用紙程度の分量とはいえ、学生に提出させた文章を読むのは大変な作業だ。物理的な意味での量も馬鹿にできない。もちろん、1行にも満たないものを提出する学生もいるが、それはレアケースで、対照的に用紙一杯、裏面まで埋めるほど書いてくる学生の方が多いくらいだ。その全てに目を通すことはなかなかの難事、なおかつ、これを出席のチェックとして活かす場合、学籍番号順に並び替える作業が加わる。経験している教員であればよく判るだろうが、たとえ出席者が500人であったとしても、必修科目であればこの作業にさして時間はかからない。出席者の学籍番号が揃っているからだ。しかし、教養の授業の出席者は学部学科を越えているため、提出物の整理に困難が伴う。番号が飛んでいるのは欠席だからではなく、そもそも履修していないからであって、今手にしている用紙の次にどの用紙が来るべきなのか、出席簿とにらめっこをしながらでなければ判断できない。それがいくつかの学部、いくつかの学科に亘ることとなる。担当する全ての授業に関してこの並べ替えの作業を行うと、半日を費やさざるを得ないこともあるほどだ。こうなると、本来の目的である授業、その準備そのものに大きな影響を及ぼしかねない。ならば時間のできたとき、半期の授業を終えてから成績の提出をする期間にまとめて行えば授業への影響はないのではないか、そうはいかない事情がある。

私の場合、回収したコメントからいくつかのものをピックアップした上で翌週、授業冒頭で紹介、同時にそのコメントに対する私からのコメントを述べる。授業の中で判らなかつたこと、授業に出席しながら独自に考えたこと、それらとは一線を画す、好きな映画や小説は何かといったプライベートにまつわる質問など多岐に亘るが、それらについて多いときには6

つほどのコメントを取り上げる。ただし、次回の授業にそのコメント用紙を持参してとなると、出席チェックを兼ねたものとして、資料の保管という意味で適切ではあるまい。そこで以前の私はコメントの重要部分をテキストとして、例えばワープロソフトなどを用いて転記し、一覧で見られるようにしていた。用紙は手元にそのままの形で残っているので、データ整理という意味ではこの対応で充分だろう。この方法をとって見たところ、図らずも一つの利点があることに気付かされた。5つ、ないし6つのコメントをどういう順番で紹介すれば今週の授業にスムーズに入って行かれるか、一覧となっていることでその構成を考えることが容易なのだ。6つのコメントを単に羅列して紹介するのではなく、話の到達点を目指すべく適切に並べて話をする。15回の流れの中で、こういった前週の振り返りが今週の話へと上手く接続できればベストだ。今週の話はどこを出発点とし、どこへと辿り着こうとしているのか、それが明瞭となる。これは大きな利点だ。ただし、いくつもの授業でこの転記作業をこなしてゆくと、それこそ丸一日がつぶれてしまうことになる。

コメントを紹介すれば、紹介された本人だけではなく、その発言が自分と同じ立場である学生によるものだという点で、多くの学生にとって大いに刺激となるようだ。担当教員と学生との個人的な遣り取りにすれば、1対1の密な関係を築くことができるかもしれないが、むしろ全体に開示してしまった方が（この際、匿名とするかどうかは微妙な問題かと思われる。実名の方が良いことも多くあろう。しかしながら私の場合は個人が特定されぬよう配慮している）、他学生への刺激という意味でより有意義であるように思う。また、15回の授業それぞれが学生の中でも有機的に接合されるのであれば、これまた学生にとって大いに意味のあることと言えるだろう。しかし、それを行うことで授業準備の時間が削られ、授業そのものの足を引っ張ってしまうのであるなら本末転倒、たとえ学生にとって何かしらの意味があることであっても行うべきではない。ならばどうすべきか。

条件は用紙という物理的なものの排除、転記という作業の排除、コメントの一覧化、この3つとなる。これらを考えたとき、すぐに思いつくのはテキストデータで集めてしまう方法だ。出欠のチェックのために必要な学籍番号と名前というデータ、同時にコメントのデータ、それを集めて一覧表にしてくれる、ここまでをパソコンが自動でしてくれるならば、担当教員が行わなければならないことは本来の目的である、必要なコメントをピックアップすることと、それを話す上での構成、つまり順番を決めることだけだ。授業の際、手元にタブレットがあれば、一覧表をプリントアウトする必要すらない。

あとは、どの様な方法でデータを集めるかである。パソコンを使うとなれば、授業そのものをパソコン完備の教室で行うか、もしくは授業後、自宅でも記させることになる。だが、そもそも出席者数が多いところに問題があるので、パソコンを備えた教室というのは成り立たないし、自宅での入力とすれば、部活やサークル、アルバイトなどがあることで、授業が終わればまっすぐ家に帰ることが希である中、学生にとっての負担があまりに大きすぎるだろう。いずれも適切な方法とは言い難い。

そこで（私物であるということ考えたとき、随分と大きな躊躇いがありはしたが）、今や大学生の所有率は100%に近い、スマートフォンを活用するのが最も効率的かつ適当ではないかと考えた。他者とのコミュニケーションツールとしてまず思い浮かぶのはメールを使用することで、ほとんどの学校で学生向けに独自のメールアドレスを配布している現状を考えれば最も使い勝手の良いものと考えられるが、ただしこの方法ではコメントを一覧表示にしようとする際、膨大な作業を伴ってしまう。学籍番号を基準としてメールを並べ換えてしまえば本人確認を行うことは容易だが、コメントに関してはすべてコピー&ペーストを行うなどの作業を挟まねばならない。また、特殊なアプリケーションを導入するとなると、OSの違いや、そもそも強制的にダウンロードさせるという、教育現場にはそぐわないことを学生にさせねばならなくなってしまう。そこで私はWebブラウ

ザ内で完結させることのできるGoogleフォームを用いてデータを入力させる方法を選んだ。

本来であればその大学内部へと閉ざされた形で使用できるオンラインストレージ機能を用いるべきだろう。たとえばMicrosoftのOffice365を導入しているのであればFormsとExcel onlineを使用すれば良い。オンライン上のものを使用するならば必ず情報流出の危険性を考慮せねばならないが、学校内部に閉ざされたもの（同じドメインでなければ共有も掛けられないといった設定）であれば、その危険性も低減される。しかし、非常勤講師であれば、いくつかの学校にまたがって授業をするのが普通だ。同じようにOffice365を使っていたとしても、同ドメイン内でなければ共有をかけることすらできない設定となれば、学校ごとに使用する環境やストレージを変えろということになるのだが、それでは無駄を省くという目的が阻害されてしまう。よって、個人でアカウントを作成した、私の場合はGoogleを用いた。使い勝手にはそれほどの差は無いと個人的には思うので、もちろんMicrosoftのOffice365を使用する手もあるだろう。

日付・出席曜日・出席時限・授業名・学籍番号・名前・授業へのコメントをそれぞれ記入させるフォーム（図1）を作成し、初回授業にて配布した資料にQRコードを提示することでフォームにアクセスさせる。経験上、ほとんどの場合この方法で問題は出ないが、希にQRコードの読み込みそのものができない、または判らないという学生がいるので、そういった場合に学生の不利益にならないよう、同時に心理的負担とならないよう、たとえば学校が独自に備えている資料配付のシステムを用いてURLを配布するなど、異なる方法を用意しておくことが必要だろう。初回到フォームを開かせた際、ブックマーク（お気に入り登録）をしておくことを推奨した。15回とも同じフォームを用いるので、ブックマークさせればQRコードを読み込む作業はこの1回だけで事足りる。毎回配付資料があれば、資料のどこかに毎度QRコードを載せるという方法もあるが、そこまでの配慮はかえって混乱を招くことになりそうだ。

日付・学籍番号・名前、もちろんコメントもだが、これらはテキスト入力の形となっている。他のものはどうしても出てしまうミス、そしてデータを整理する際に困ってしまう「表記揺れ」の排除を考慮し、それらが出ない「ラジオボタン」を選び、チェックを入れさせる方式とした。もちろんこれは「リスト」型で選択させても構わない。

授業内で10分の時間を取り、入力したら学生に送信させる。仮に担当教員が手元にパソコン、もしくはタブレットを用意するなどし、学内のWi-Fiなどに接続していれば（もちろん、手持ちのスマートフォンでも可能だし、学内にWi-Fi環境が整っていなくとも、通信環境さえ整えておけば問題はない）、送信されたものをすぐにその場で確認することもできる。それを利用して、その場で口頭にてコメントを返すということも一度ならず試みる事ができた。これは学生にも好評だったようだ。その場での遣り取りを本格的にしたのであればTwitterなどのSNSを用いるか、あるいはチャット機能を活用するかといったことになるが、

### 2017年度 出欠・コメントフォーム

授業での出欠確認とコメントを貼するためのフォームです。授業終了10分以内にお送りください。それ以降の送信は無効です。

\*必須

今日の日付を選択してください。\*

日付  
年/月/日 \_\_\_\_\_

出席曜日にチェックを入れてください。\*

月曜日  
 火曜日  
 水曜日  
 木曜日  
 金曜日  
 土曜日  
 その他 \_\_\_\_\_

出席時間にチェックを入れてください。\*

1限  
 2限  
 3限  
 4限  
 5限  
 その他 \_\_\_\_\_

授業名を選択してください。\*

(学校名) 授業名  
 (国文学部) 日本文学概論Ⅰ  
 (国文学部) 日本文学概論Ⅱ  
 (国文学部) 日本文学概論Ⅲ  
 (国文学部) 文学  
 (国文学部) 文学Ⅱ  
 (国文学部) 文学Ⅲ  
 (国文学部) 文学Ⅳ  
 その他 \_\_\_\_\_

学籍番号を小文字・半角で入力してください。\*

回答を入力 \_\_\_\_\_

名前をフルネームで入力してください。\*

回答を入力 \_\_\_\_\_

授業時間内に考えたこと、疑問に思ったこと、質問、何でも自由に入力してください。演習の場合は文章の冒頭に、誰の発表に対する質問・意見であるか、発表者の名前を記してください。\*

回答を入力 \_\_\_\_\_

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

図1



フォームを用いることで、アカウントの取得が前提となるこれらよりも簡易にそれを実現することも可能なのである。

当然、気をつけねばならないことがある。スマートフォンを所持していない学生が授業において甚だしく不利益を蒙るようなことがあってはならない。更に言えば、スマートフォンを持っていないことが心理的負担となっても問題であろう。手書きにて出したい希望のある場合は用紙を要求すること、その要求に関して担当者は何ら不都合を感じることはないこと、これらは大げさなほど強調して伝えた。ただし結果的には全担当授業の中、例えば2017年度は毎週手書きの用紙を選択した学生が1名、ほか、充電切れやスマートフォンの故障などで時折手書きを希望する学生が居た程度、2018年度はそのケースも0であった。

### 3. コメント回収方法に関する調査

学生にフォームで回答させることによって学籍番号と日付と出席時限を回収、それがオンラインのスプレッドシート（Googleスプレッドシート）上で一覧になる、ここにちょっとした関数を書き込めば、授業担当者が一切の作業を行う必要もなく、出席のチェックそのものは自動的に行うことができる。もちろん、全15回の授業のうち、特定の学生が現在何回出席しているかも回答を受け取った瞬間に反映されるので、すぐに把握することが可能だ。負担を掛けずにコメントを回収することができ、あとはスプレッドシート上で並べ換えやフィルタを駆使して必要なコメントを抽出、メモとして自分のコメントも添えておけば次回の授業の導入として、授業出席者が何を思い、1コマの授業を通して何が判らなかつたのか、それを教室全体で共有できるようになる（図2）。複数のコメントを有機的に接続でき、なおかつその週の授業内容に繋げてゆくことができれば、授業の導入としては上々のものと言えるだろう。ただしこれは運営する担当者側の問題であって、フォームによってコメントを求められ、授業の一環としてそれを強要されることとなる当の学生はどの様に感じているのか、それ

2017年度(秋) 名簿 ☆									
ファイル 編集 表示 挿入 表示形式 テータ ツール フォーム アドオン ヘルプ 変更内容をすべてドライブに保存しました									
100% 0.00 123% 10 100% 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田									
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
タイムスタンプ	今日の日	出席	出	授業名を選択してください	学籍番号	名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入	コメント	
1	2017/09/19 15:32:51	2017/09/19 火曜 3	4限	( 大学) 近現代文学 bc		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		
107	2017/09/19 15:34:28	2017/09/19 火曜 3	4限	( 大学) 近現代文学 b6l		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		
108	2017/09/19 15:33:31	2017/09/19 火曜 3	4限	( 大学) 近現代文学 b7		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		
110	2017/09/19 17:32:34	2017/09/19 火曜 3	5限	( 大学) 文学 b4l		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		
3667	2018/07/24 12:00:32	2018/07/24 水曜 3	2限	( 大学) 人文 155		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		
3668	2018/07/25 11:54:37	2018/07/25 水曜 3	2限	( 大学) 人文 155		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		
3668	2018/07/25 14:43:18	2018/07/25 水曜 3	3限	( 大学) 近代文学 15		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		
3669	2018/07/25 15:02:23	2018/07/25 水曜 3	3限	( 大学) 近代文学 16		名前を	授業時間内に考えたこと、疑問、何でも自由に入		

図2

回収されたコメント。2017年度後半期の総数は3680レコード(2回以上送られた同一内容のもの含む)。A列の「タイムスタンプ」には送信日時が自動的に刻印される。D列の「出席時間」、E列の「授業名」には条件付き書式により、自動的に色分けされるように設定してある。I列-J列は学生による回答ではなく、授業担当者が入力したもので、I列にはコメントを紹介する際のちよつとしたメモ、J列には「チェック」として話す順番を数字で入力している。「チェック」のフィールドでフィルタをかければ、紹介するコメントだけを表示することができる。\*データは実際に集められたものだが、特定を避けるために加工してある。

は考えてみる必要があるだろう。

そこで、この方法に関するアンケートを試みることにした。

アンケートは既に記した授業コメントの回収と同じくGoogleフォームを用い、「ラジオボタン」形式にて選択させる方法で回答を求めた(図3)。

フォームよりの回答は2017年度の秋学期(後期)に私の担当したすべての科目の授業最終日、2018年1月16日より26日までの期間で、口頭による調査の趣旨説明を行い、その際、個人を特定することは不可能であること、成績評価には一切の関係が無いことを強調・確認した上で回収した。フォームへのアクセスにはQRコードを用いた。

まずは基本事項として性別・学年、フォームの入力方法としてパソコンからの入力かスマートフォンからか、参考までにスマートフォンの場合OSは何かを問いとして設定した。

調査対象者は東京近郊の3大学(内、2校は女子大学)にて私の担当する授業の受講者で、得られた回答者数は合計230名であった。内訳は、男性79名・女性149名・保留2名、1年生55名・2年生85名・3年生74名・4年生16名、フォームの入力方法についてはパソコン34名・スマートフォン(Android)49名・スマートフォン(iOS)147名・その他0名であった(表1)。

スマートフォンにての入力に関する調査であることが前提であるにも関

### コメントフォームに関するアンケート

牧田原担当の授業では出欠簿を書き、自らの履修・履修を担当教(牧田原)に向けて表明する。コメントフォームを用いたコミュニケーションを採用しました。  
 その方法が効果的かどうかによってどの程度の期待があったのか、どのほど負担を感じるものであったのかなど、豊富な意見を伺いたく、アンケートを採らせて頂きたいと思っております。  
 回答は無記名、誰がどの様に回答したかは一切、判らないシステムです。もちろん、成績に関わるような事はありません。  
 牧田原の授業に複数出席している方は、お手続ですが授業ごとに回答下さい。  
 続ける、続けないを目的、今後の授業運営の参考にさせて頂きたいと思っておりますので、お手数ではありますがご協力をお願いします。  
 どうぞよろしくお願いたします。

\*必須

性別\*

男性

女性

保留

その他 \_\_\_\_\_

学年\*

1年生

2年生

3年生

4年生

その他 \_\_\_\_\_

フォームの入力方法\*

パソコン

スマートフォン (Android)

スマートフォン (iOS)

その他 \_\_\_\_\_

次へ

Google フォームでパスワードを記憶しないでください

図3

ならず、パソコンよりの入力14.8%もあるのは少々奇異なことではあるが、これは私の担当する授業の内、パソコン教室にて行われる情報系のものがあったためであろう。帰宅後、あるいはその場を離れてパソコン教室にて、または教室に持ち込まれたノートパソコンから入力されたものはごく少数であろうことが推測される。

表1. 回答者の内訳

性別		学年		入力機器		人
男性	79	1年生	55	パソコン		34
女性	149	2年生	85	スマートフォン(Android)		49
保留	2	3年生	74	スマートフォン(iOS)		147
その他	0	4年生	16	その他		0
合計	230	合計	230	合計		230

これら基本事項に続き、「コメント回収の方法について」として「Q1. パソコン・スマートフォンによる入力と配布された用紙に記入するのでは、どちらの方が良いですか?」との問いを設定し、「1. パソコン・スマートフォンによる入力が良い」「2. 配布された用紙への記入が良い」「3. どちらでも構わない」の3つの選択肢を用意、中から1つを選ばせた(表2-1)。ここで選択した回答に従い、理由を尋ねる次の設問へと進ませたが、「3. どちらでも構わない」を選択した回答者に関してはその理由についての回答を選択させることなく、次の設問へと進ませた(「1」を選んだ回答者は表2-2の問いへ、「2」を選んだ回答者は表2-3の問いへ、「3」を選んだ回答者は後に挙げる「授業タイプ」に関する質問へと進ませた)。

理由として挙げられるそれぞれの選択肢は調査者である私が独自に作成し(表2-2、表2-3)、「その他」を選んだ場合はその理由について記せるよう、自由記述欄を設けた。本来は「1. パソコン・スマートフォンによる入力が良い」「2. 配布された用紙への記入が良い」の双方の回答者に対し、正しく対応した選択肢を提示すべきではあるが、問いの性質上そ

れが困難であったため、結果として異なった内容、正しく対応していない選択肢を提示することとなってしまった。この問題点に関しては「その他」を設定し、自由記述を用意することで対応した。

表 2-1. 質問事項と対応する回答の選択肢

問い	選択肢
Q1. パソコン・スマートフォンによる入力と配布された用紙に記入するのでは、どちらの方が良いですか？	1. パソコン・スマートフォンによる入力が良い
	2. 配布された用紙への記入が良い
	3. どちらでも構わない

表 2-2. 質問事項と対応する回答の選択肢

問い	選択肢
「Q1.」で「1. パソコン・スマートフォンによる入力が良い」と答えた人にお訊ねします。その理由は何ですか？ 近いと思うものを以下から選んで下さい。(複数回答可)	パソコン・スマートフォンでの入力の方が紙に書くよりも楽だから
	自分で入力したものを保存しておけるから
	授業時間に縛られず、いつでも入力することが出来るから
	書けない漢字を変換で簡単に入力できるから
	現代的だから
その他	

表 2-3. 質問事項と対応する回答の選択肢

問い	選択肢
「Q1.」で「2. 配布された用紙への記入が良い」と答えた人にお訊ねします。その理由は何ですか？ 近いと思うものを以下から選んで下さい。(複数回答可)	紙に書く方がパソコン・スマートフォンでの入力よりも楽だから
	箇条書き・イラスト・表など、形を決められずに自由に記入することが出来るから
	授業時間内で集中して記入することが出来るから
	電池の残量や送信ミスなどを気にする必要がなく、確実に提出できるから
	勉強している感じがするから
その他	

続いて出席した授業の形態に関する情報を「授業タイプ」として問い（表3-1）、その回答に応じて、回収したコメントの活用・運用方法を「その他」を含めた7つの選択肢より選ばせた（表3-2）。ただし、「授業タイプ」を問うた際に「実習」を選んだ場合は、そもそも授業においてコメントの回収を行っていなかったもので——ここで「実習」に振り分けたのは情報系の授業であって、ほとんどの質問や意見は授業内で個人的に行うスタイルのため、そもそもコメントを求めてはいなかった——、活用方法に関する設問に回答させてはしない。もちろん、回答に際して私の方から授業のタイプを指示するようなことはしていないので、誤りなどを含めればこの限りでないことは言うまでもない。

表 3-1. 授業形態についての設問

問い	選択肢
履修上の区分や授業のタイプ(情報系など作業中心の実習、担当者(奴田原)主体で進められる講義、出席者中心の演習など)、どのようなものに出席していたのかを、以下から選択して下さい。	作業が中心となる実習
	担当者主体で進められる講義
	出席者中心の演習

表 3-2. コメントの活用方法についての設問

問い	選択肢
Q2. 回収されたコメントについて、どのような活用方法が良いと思いますか。もっとも近いと思うものを以下より1つ、選んで下さい。	担当者だけが目を通す
	出席者全員のコメントを見ることができる
	匿名にした上で、出席者全員のコメントを見ることができる
	他の出席者のコメントに、さらにコメントを記入できる
	匿名にした上で、他の出席者のコメントに、さらにコメントを記入できる
	コメントの回収は必要ない
	その他

パソコンによって回答をした一部を除き、スマートフォン上のフォームを用いてアンケートを行った訳だが、そうになると操作方法や、果たして真面目に答えてくれているのかなど、紙ベースの調査に比べて考慮せねばならない部分もあろうが、既に少なくとも半期、私の授業に際してこの方法での回答に慣れている学生であることを考えれば、大きな問題と捉える必要もないものと思う。

#### 4. 調査における回答の傾向

回収方法に関する「Q1. パソコン・スマートフォンによる入力と配布された用紙に記入するのでは、どちらの方が良いですか？」との問いに対して得られた回答データより、いくつかの観点について考えてみたい(表4)。

まずは入力された性別による傾向だが、男女による差は見られないと考えて良さそうだ。男性79人中、「1. パソコン・スマートフォンによる入力が良い」を選んだ者が47人、「2. 配布された用紙への記入が良い」が6人、女性の場合が149人中「1」が86人、「2」が14人となっている。いずれも「1」としてパソコンやスマートフォンによる記入を選んだ者が6割に近く、全体的な割合とも合致する。経験上、男性の方がデジタル入力を望む割合が高いように感じていたが、そのような差を見出すことはできなかったと言って良さそうだ。

次に学年ごとの傾向を見てみたい。それぞれの学年の合計人数が随分と変わるため単純な比較はできないが、パソコンやスマートフォンによる入力を選ぶ割合は学年が上がるにつれて下がってゆく。1年生が「1」を選択した割合は65%を超えるが、4年生となると45%を下回る。この20%以上の開きは当然、1年生合計の55人と、4年生合計の16人という分母との関係で考えられねばならないが、むしろここでは「1」を選んだ割合よりも「3. どちらでも構わない」を選んだ割合の方が重要であろう。「3」を選んだのは1年生の中では27.3%であるが、4年生では43.8%となって

表4. 「Q1」に対する回答数と相対頻度

Q1. ハンコン・スマートフォンによる入力と配布された用紙に記入するのでは、どちらの方が良いですか？	合計				学年別				探検タイプ別					
	男性		女性		1年生		2年生		3年生		4年生		探検	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1. ハンコン・スマートフォンによる入力が良い	58.7	(79)	57.7	(149)	65.5	(55)	60.0	(85)	55.4	(16)	43.8	(36)	66.7	(178)
2. 配布された用紙への記入が良い	8.7	(7)	9.4	(66)	7.3	(4)	9.4	(6)	8.1	(7)	12.5	(0)	8.4	(106)
3. どちらでも構わない	32.6	(26)	32.9	(49)	27.3	(15)	30.6	(26)	36.5	(27)	43.8	(12)	33.3	(32)
	(75)													

表5. ハンコン・スマートフォンを選んだ理由に関する回答数と相対頻度

「1. ハンコン・スマートフォンによる入力が良い」と答えた人にお訊ねします。その理由は何ですか？ 近いと思うものを以下から選んで下さい。(複数回答可)	合計				学年別				探検タイプ別					
	男性		女性		1年生		2年生		3年生		4年生		探検	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
ハンコン・スマートフォンでの入力の方が紙に書くよりも楽だから	48.5	(65)	46.8	(173)	62	(103)	54.8	(42)	47.6	(55)	44.2	(13)	53.9	(42)
自分で入力したものを保存しておけるから	7.2	(19)	3.5	(3)	11.3	(7)	4.9	(5)	5.8	(2)	15.4	(4)	9.5	(15)
授業時間に構わらず、いつでも入力することが出来るから	21.6	(57)	17.7	(40)	19.4	(12)	21.4	(22)	23.3	(20)	23.3	(3)	14.3	(6)
書かない漢字を家族で簡単に入力できるから	9.1	(30)	11.8	(11)	11.3	(7)	12.6	(13)	11.6	(10)	11.6	(0)	14.3	(6)
現代的だから	2.3	(6)	1.2	(1)	1.6	(1)	11.7	(1)	12.8	(0)	10.4	(0)	4.8	(2)
その他	13.5	(14)	14.3	(4)	11.1	(1)	16.7	(16)	7.5	(7)	7.7	(2)	2.4	(5)

表6. 紙を選んだ理由に関する回答数と相対頻度

「2. 配布された用紙への記入が良い」と答えた人にお訊ねします。その理由は何ですか？ 近いと思うものを以下から選んで下さい。(複数回答可)	合計				学年別				探検タイプ別					
	男性		女性		1年生		2年生		3年生		4年生		探検	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
紙に書く方がハンコン・スマートフォンでの入力よりも楽だから	27.0	(7)	26.7	(30)	33.3	(9)	31.3	(16)	20.0	(10)	20.0	(2)	30.8	(26)
簡易書き・イラスト・表など、形を決められずに自由に記入することが出来るから	2.7	(1)	0.0	(0)	0.0	(0)	0.0	(0)	10.0	(2)	0.0	(0)	0.0	(0)
授業時間内で集中して記入することが出来るから	21.6	(8)	20.0	(6)	22.2	(2)	18.8	(3)	20.0	(2)	50.0	(1)	0.0	(0)
郵送の残量や送信ミスなどを気にする必要がなく、簡単に提出できるから	32.4	(12)	28.6	(10)	33.3	(3)	37.5	(6)	30.0	(3)	0.0	(0)	23.1	(8)
勉強している感じがするから	2.7	(1)	0.0	(0)	0.0	(0)	0.0	(0)	10.0	(1)	0.0	(0)	0.0	(0)
その他	13.5	(5)	14.3	(4)	11.1	(1)	12.5	(1)	10.0	(2)	50.0	(1)	11.5	(3)



いる。「3. どちらでも構わない」と回答した者の潜在的な欲望・希望の考慮には慎重であらねばならないが、大学の授業において多くの科目でいわゆる「リアクションペーパー」の回収は日常的なものとなっており、4年生は既に多く経験済みであることが予想される。それに比して1年生は経験値という面では著しく劣るであろう。学生生活の中でこれまでに数え切れないほどの「リアクションペーパー」を記してきた4年生が今更その方法を聞かれたとして、どちらでも構わないという回答を選択することは、自然なことと言えるかもしれない。むしろここでは、大学入学より1年を経ている学生が、恐らく紙での提出をも経験しつつ、65%以上の者が「1」を、いや、むしろ「2」の紙での提出を望んだ者が僅か7.3%であったということ、実数では55人中4人であったということに注目しておきたい。紙での提出の希望が全体においても8.7%、230人中で20人の選択であったことは、パソコン・スマートフォンによるコメント回収という方法が学生にとって負担とはなっていないということを示すデータとして捉えても良いことのように思われる。

この「Q1」に関して、中でも興味深いのは授業タイプ別の回答数であろう。各授業は「実習」「講義」「演習」と分けたのだが、「演習」に関しては回答数がほぼ綺麗に三等分されている。「実習」の中で紙への記入が0人であるのは、これが情報系の授業であり、このアンケート自体もパソコンによって答えさせている点を考慮すればその理由も比較的明白になるだろうが、これに比べて「演習」が見事に分かれているのは特徴的な回答として捉えるべきことと思われる。いや、三等分というよりは「どちらでも構わない」をとりあえずの考慮対象から外し、パソコン・スマートフォンと紙との選択が同数であるということに注目すべきであろう。実は演習タイプの授業の場合、コメントとして入力される文章量は比較的少ない。それは「演習」の授業が、もちろん全員が毎回できる訳ではないが、既に自分の考えをその時間内に口頭にて表現していることが前提として考えられるものだからであろう。担当教員への直接的な疑問も、授業時間内に消化さ

れている場合が多い。それらの事情によるコメント量の少なさなのであろうが、その結果、スマートフォンでも紙でも、まさに「どちらでも構わない」と分析できるデータとなったのではないか。「演習」という観点に注目した際のデータの偏り——綺麗に三等分されるという偏り——よりは授業タイプそのものが影響していることを考慮せねばならない。少人数であることを含め、演習のような授業ではそもそもコメントを回収する意味はなさそうだ。

さて次に、「Q1」に対して「パソコン・スマートフォン」と「紙」のそれぞれを選択した理由について、上と同様性別や所属学年などによる傾向をみてゆきたい。

まずは「パソコン・スマートフォン」を選んだ理由として圧倒的な支持を受けたのが「楽だから」という選択肢であった（表5）。全体の回答の中で48.5%である。5割を切るものが〈圧倒的〉とは妙な表現かも知れないが、これは複数回答が可能な問いの中で全回答数を分母とした時の数値。本来この分母となるべきは135人と考えられよう。その中で128人が「楽だから」との理由を選んでいることとなるので、実に94.8%をその理由が占めるということになる（表7）。紙を選んだ者も含めた回答者全体に占める割合を計算してみても、55.7%（=128/230）の学生がパソコンやスマートフォンによるコメントの提出を「楽だ」と感じていることとなる。

次いで多く選択されたのが「授業時間に縛られず、いつでも入力することが出来るから」であった。これは少し意外な結果でもある。選択肢を設ける上で多くなるであろうと予測していたのは「書けない漢字を変換で簡単に入力できるから」。キーボードに馴染んだ世代は読めても書けない、これは大学生に限られない社会一般の問題でもある。私自身も免れない。しかしながら結果としてこれは全体の11.4%、人数比でも135人中30人の22.2%であった。少ない数字ではないだろうが、結果として「いつでも入力することができる」の方が2番目に多く選ばれた選択肢であった。人数比で見て、135人中57人（42.2%）がこの選択肢を選んでいることから何

を読みとるべきであろうか。

「楽だから」、これを選んだのが94.8%に上る。となれば、「いつでも入力できる」と回答した42.2%の学生はほぼ双方を選んだと考えて差し支えない。「楽だから」という選択肢にチェックを入れた人間のうち、少なくとも4割の者は「楽」ということばから想像されるいい加減さ、無気力さといったものからはかけ離れているということだ。コメントという形での授業参加をどうしても良いと考えている人間が、教室という空間を離れてまでコメントを入力しようとしているとは思えない。授業という限られた時間の中でコメントを入力するだけでは満足がいかない、そんな思いをここに見出すことも不可能ではないだろう。もちろん、教室から速やかに離脱したい、そんな思いも考慮せねばならないだろう。例を提示することは避けておくが、遅れて提出されたコメントに質と量の双方から無気力さが見られることもある。しかし、授業から時間が経った後に、びっしりと自分の考えを書いて送ってくる学生も少なくないのだ。「いつでも入力することが出来る」、これを選択した学生の多さに、授業に対する積極的な参加態度を見出すことは間違いではあるまい。

全体として「その他」の選択は非常に少ない。264の回答数の内、僅か2.3%である。人数比で見ても4.4%。「その他」を選んだ者がそのほかの選択肢を同時に選んでいたかどうか、その正確なデータをここに提示することはしないが、6人が入力していることは確実な事だ。その意味で注目したいのは、「2. 配布された用紙への記入が良い」を選んだ回答の内、5人が「その他」を選んでいる点であろう（表6）。人数比で見れば25.0%（表8）。4人に1人が「その他」を選び、その上で自由記述としてテキスト入力していることは、スマートフォン入力を良しとした中で6人、4.4%（表7）であることとは大きな開きがある。これは十分に考えてみるべき所だが、それは後に自由記述の内容と合わせて見てゆきたい。

紙での提出を選んだ中で最も支持を集めたのは「電池の残量や送信ミスなどを気にする必要がなく、確実に提出できるから」であった。20人中12

人、60.0%がこの理由を選び、「紙の方が楽だから」が50.0%でこれに続く。そもそも紙による提出を選択したのが20人という、データとしてごく少数である故、ここで過半数を越えているかどうかなどを考えることにあまり意味はないだろう。ただし、最も支持を得た選択肢が紙での提出を積極的に選んだのではなく、パソコン・スマートフォンでの提出を拒む形という、デジタル提出を基準としたならばネガティブと価値付け得る理由であることは注目して良いことのように思われる。

表7. パソコン・スマートフォンを選んだ回答者数（135人）に占める回答数とその割合  
%(人)

「1. パソコン・スマートフォンによる入力が良い」と答えた人にお訊ねします。その理由は何ですか？ 近いと思うものを以下から選んで下さい。（複数回答可）	合計 (135)	男女別			学年別			
		男性 (47)	女性 (86)	保留 (2)	1年生 (36)	2年生 (51)	3年生 (41)	4年生 (7)
パソコン・スマートフォンでの入力の方が紙に書くよりも楽だから	94.8 (128)	95.7 (45)	94.2 (81)	100.0 (2)	94.4 (34)	96.1 (49)	92.7 (38)	100.0 (7)
自分で入力したものを保存しておけるから	14.1 (19)	6.4 (3)	18.6 (16)	0.0 (0)	19.4 (7)	9.8 (5)	12.2 (5)	28.5 (2)
授業時間に縛られず、いつでも入力することが出来るから	42.2 (57)	31.9 (15)	46.5 (40)	100.0 (2)	33.3 (12)	43.1 (22)	48.8 (20)	42.9 (3)
書けない漢字を変換で簡単に入力できるから	22.2 (30)	23.4 (11)	22.1 (19)	0.0 (0)	19.4 (7)	25.5 (13)	24.4 (10)	0.0 (0)
現代的だから	17.8 (24)	21.3 (10)	15.1 (13)	50.0 (1)	2.8 (1)	23.5 (12)	26.8 (11)	0.0 (0)
その他	4.4 (6)	2.1 (1)	4.7 (4)	50.0 (1)	2.8 (1)	3.9 (2)	4.9 (2)	14.3 (1)

表8. 紙を選んだ回答者数（20人）に占める回答数とその割合  
%(人)

「2. 配布された用紙への記入が良い」と答えた人にお訊ねします。その理由は何ですか？ 近いと思うものを以下から選んで下さい。（複数回答可）	合計 (20)	男女別			学年別			
		男性 (6)	女性 (14)	保留 (0)	1年生 (4)	2年生 (8)	3年生 (6)	4年生 (2)
紙に書く方がパソコン・スマートフォンでの入力よりも楽だから	50.0 (10)	33.3 (2)	57.1 (8)	0.0 (0)	75.0 (3)	62.5 (5)	33.3 (2)	0.0 (0)
箇条書き・イラスト・表など、形を決められずに自由に記入することが出来るから	5.0 (1)	0.0 (0)	7.1 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	16.7 (1)	0.0 (0)
授業時間内で集中して記入することが出来るから	40.0 (8)	33.3 (2)	42.9 (6)	0.0 (0)	50.0 (2)	37.5 (3)	33.3 (2)	50.0 (1)
電池の残量や送信ミスなどを気にする必要がなく、確実に提出できるから	60.0 (12)	33.3 (2)	71.4 (10)	0.0 (0)	75.0 (3)	75.0 (6)	50.0 (3)	0.0 (0)
勉強している感じがするから	5.0 (1)	0.0 (0)	7.1 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	16.7 (1)	0.0 (0)
その他	25.0 (5)	16.7 (1)	28.6 (4)	0.0 (0)	25.0 (1)	25.0 (2)	16.7 (1)	50.0 (1)

デジタル世代とはいえ、もちろんそれは個人差のあること。また、それまでに行ってきたであろうと想定される紙による提出という方法を転換させるには、仮にそれが便利だと思っただとしても大きなストレスを抱えるものでもある。改革を望みつつも変化を拒絶する、それは人間の性とも言える根深い問題と言えるかもしれない。あるいは物理的な提出、つまり紙を担当教員へ手渡しするという行為が、自らがその授業に参加していたことを自分に対して証明する大切な儀式、そこまでは言い過ぎであったとしても、少なくとも自己確認の行為であることも否定できない。デジタル的な提出ではそれを感じられないだろうことは配慮せねばならないことでもある。こういった学生の微妙な心理も推し量らねばならないが、ともかくもこの回答データから見出し得ることは、紙の提出が積極的に選ばれているのではなく、スマートフォンでの提出を回避したいという思いであることは確かなことであろう。

## 5. 回収されたコメントの運用法に関する調査

さて、コメントの提出方法についての調査に合わせて行った、その運用方法についての問いだが、これは予想通り、約半数が「担当者だけが目を通す」という方法を選択した（表9-1、実習タイプの授業出席者には回答させていないなどの理由により総回答数は190）。次いで選ばれたのが「匿名にした上で、出席者全員のコメントを見ることができる」で、31.6%を占めた。

この設問で特徴が見出せるのは授業タイプ別の分類である。演習科目出席者で「担当者だけが目を通す」を選んだ者は皆無であった。それを別にすれば支持が集まったのは全体と同じく「匿名にした上で、出席者全員のコメントを見ることができる」であったが、注目すべきは演習タイプの授業ではこの選択肢の文章から「匿名」の部分を削ったものが多く選ばれていることである。31.3%は分母が16人であることを思えば僅かな数字ではあるが、やはり特徴的であるとは言えるだろう。これを考えるにおいては

当然、演習という授業形態の特徴を考慮せねばならない。授業内において既に挙手し、意見表明を行っているのが前提であり、なおかつ出席者は、一般的には多くとも20人前後が想定される（もちろん、40人に近い学生数で演習を任されることもあるが）。更に、私の担当していた演習科目は初年次の学生が履修するものではなく、2年生以上であったことを考えれば、既に互いを見知った間柄であることが考えられるのだ。そうとなれば、その中で匿名性を維持することはあまり意味がない。それが、全体の傾向とは異なったものを示すこととなった要因であろう。また、誰も「担当者だけが目を通す」を選ばなかったことに関しては、発表という行為そのものが影響しているように思える。発表を行った以上、それがどの様に受け取られたのか、恐る恐るであったとしても聞いてみたいと思うのは当たり前のことでもあろう。演習の授業でコメントを求められたのであれば、それは当然、発表そのものに対するものとなる。故に、それを授業担当者だけが見るという方式では、何の意味も無い、それを感じ取っての選択であろうと思われる。

表 9-1. コメントの活用法

%(人)

Q2. 回収されたコメントについて、どのような活用法が良いと思いますか。もっとも近いと思うものを以下より1つ選んで下さい。	合計 (190)	男女別			授業タイプ別		
		男性 (60)	女性 (128)	保留 (2)	実習 (0)	講義 (174)	演習 (16)
担当者だけが目を通す	49.5 (94)	43.3 (26)	52.3 (67)	50.0 (1)	0.0 (0)	54.0 (94)	0.0 (0)
出席者全員のコメントを見ることができる	7.9 (15)	8.3 (5)	7.8 (10)	0.0 (0)	0.0 (0)	5.8 (10)	31.3 (5)
匿名にした上で、出席者全員のコメントを見ることができる	31.6 (60)	31.7 (19)	32.0 (41)	0.0 (0)	0.0 (0)	29.3 (51)	56.3 (9)
他の出席者のコメントに、さらにコメントを記入できる	1.6 (3)	1.7 (1)	1.6 (2)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.7 (3)	0.0 (0)
匿名にした上で、他の出席者のコメントに、さらにコメントを記入できる	6.8 (13)	11.7 (7)	3.9 (5)	50.0 (1)	0.0 (0)	6.3 (11)	12.5 (2)
コメントの回収は必要ない	2.6 (5)	3.3 (2)	2.3 (3)	0.0 (0)	0.0 (0)	2.9 (5)	0.0 (0)
その他	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)

活用法について問うたものの中で、匿名か否かに関わらず「他の出席者のコメントに、さらにコメントを記入できる」との選択肢はあまり支持されな

かったと考えて良さそうだ。匿名か否かの部分を考慮せず、「コメントを見る」「さらにコメントを記入できる」のそれぞれの選択肢を一つのまとまりとして合算してみたとしても、その割合はわずか8.4%でしかない（表9-2）。

表 9-2. コメントの活用法（合算）

選択肢	% (人) 合計 (190)
担当者だけが目を通す	49.5 (94)
出席者全員のコメントを見ることができる	39.5 (75)
他の出席者のコメントに、さらにコメントを記入できる	8.4 (16)
コメントの回収は必要ない	2.6 (5)

このように学生相互がコメントにコメントを記入することで、そこで教室という空間からは独立した、つまりは担当教員の手から離れたところで議論が交わされることは理想的な事であろう。こういった場面を想定しての選択肢、つまり学びに対する自立性を調査してみたのだが、それを選択したのは16人、全体の8.4%であった。この想定に対して、アンケート結果としては否定的なものとなったと言える。実際に運用してみれば異なる結果も得られるかもしれないが、少し残念ではある。しかし、そこに学生の消極的な態度を見出そうとすることは安易に過ぎるかもしれない。教室という空間を離れてまで学生を縛ることは適切な効果を生むとも思えない。また、必ずしも議論にまで発展しないことを、問題を深く考えていない消極的な態度と受け取らねばならない訳でもあるまい。そう考えるならば、授業とは何か、大学とは何か、今自分のすべきことは何かを冷静に眺めた故の回答と評価できるものであるとも考えられる。学生が履修せねばならない科目は他にも数多くある。担当教員の理想ばかりを学生に押しつける訳にはいかない。

## 6. コメントを通した学生との距離

あくまでもアンケートという形で見ただけにおいてのものではあるが、パソコンやスマートフォンによってコメントを回収することは学生の中でそれほどストレスとはなっていない、むしろ電池の問題などをクリアすれば紙による提出よりもはるかに歓迎されているだろうことが確認できたかと思う。もちろんこれは選択肢にチェックが入れられたものを数えたに過ぎないのだが、そこから少し離れてみるために、例えばパソコンやスマートフォンを良しとした上で、理由として「その他」を選んだ回答者の自由記述欄を見てみると、以下のようなことが記されている<sup>5)</sup>。

「字が汚いのを気にしており、きっと読みづらいだろうな、などと気にしてしまうため。」(女性、3年生)

「そもそも出席が成績に影響することに疑問を感じているので、この方法はわたしにはとても合っていると感じました。」(男性、2年生)

「簡単に質問を返してもらえるから」(女性、2年生)

「頭の中で考えたことを、そのままのスピードで表すことができるのは筆記よりも入力方式の方だから。」(女性、1年生)

「回答する内容の前後の文などの確認がしやすく、字の綺麗汚いなどにも左右されないためとても良いと思う」(女性、3年生)

「教員、学生、両者ともに確認が容易にでき、共有できるから。」(保留、4年生)

2つ目に挙げた「出席」に関する記述は、私が授業内でコメントを集める際に、これはあくまでも毎週の課題として求めているものであり、出席チェックという使い方は副次的なものであることを強調したことによるも

---

5) 自由記述は後に引用する「紙」を選んだ者も含めてすべてのものを提示。文章はすべて原文のまま。



のであろう。この他、字の問題は如何にも現代的なコメントで、かつて大平健によって指摘された「やさしさ」<sup>6)</sup>を連想してしまうが、その他のコメントはデジタルであることの利点を的確に突いたものと言える。「簡単に質問を返してもらえる」や「共有できる」よりは、学生と担当教員との距離を縮めるものとしてデジタルデータの送信が役立っていることを表しているを受け止めることができるが、これはまったくの想定外の捉えられ方でもあった。よく言われる、手書きによる親しみ、そこには両者の距離を近づける要素があることを想像できるが、デジタルデータであることがそれを実現する場合もあるということを、これらのコメントから読みとることができるだろう。

一方、以下に挙げたのが紙での提出を選んだ上、「その他」として書かれた自由記述による理由だ。

「スマートフォンを忘れると確実に欠席扱いになってしまう。」(男性、4年生)

「何回か提出(送信?)を忘れてしまったことがあったから」(女性、1年生)

「自分の管理不足であることは重々承知しているのですが、提出することを忘れてしまったり、送信できていなかったりすることがあったため」(女性、2年生)

「出席していない学生が、自宅から出欠を送る不正を防げるから。」(女性、3年生)

「紙で配布されれば出し忘れの心配がないから」(女性、2年生)

---

6) 大平健(1995)には過剰なほどに相手を気遣う「やさしさ」が現代的な心理として紹介されている。

この5つの回答に共通するのが出欠調査に関することへの危惧で、これは事前の私からの説明が十分に伝わっていないことを示している。スマートフォンを通して行っていたのはあくまでも「課題」の提出であって、出席調査ではない。その理解があれば4つ目に挙げた「不正」を考える必要はないのだが、副次的とはいえこの方法によって出欠調査をしていることも事実である。となれば「不正」についても考えねばならない。2018年度の時点では「キーワード」という欄を新たに設けて、この問題に対するある程度の対処を行っている。「キーワード」は担当者から発表するのではなく、学生が1コマの中で中心と判断した話題を一言で記させているのだが、これで不正を防げないのは元より承知している。より厳密に行うのであれば送信時間を徹底的に限定したり、当日の出席者だけが認識可能な毎週更新されたQRコードを配布したり、担当者より特定のキーワードを発表して入力させたり、出席のみを授業冒頭にて回収しコメントは改めて回収したり（タブレットなどでその場でチェックできるので、数名の所在を確認するなどを数度行えば不正を防ぐことになるだろうと考えられる）、色々と対処は考えられるのだが、これらは基本的に学生を疑うことを発想の元としている。それを行うことでコメントの中身、更には教室の雰囲気「管理」の方へ向かってしまうというデメリットへの危惧がどうしても拭えない。実際に運用してみなければ学生がどのような反応をするのかは判らないが、信用されていないという思いを生んでしまう方が出席の不正よりも恐ろしく思ってしまうのは、単なる私の思い込みとして片付けるべきことであろうか。もちろん「不正がある」と思う学生の不満も尊重せねばならない。授業担当者や出席者が、より負荷のかかることを承知で作業すれば不可能とは言えないが、現時点ですべてに満足が行くような方法はないという認識にあるといったところである。

さて、こういったシステム上の問題点について留保しておくならば、ここでもやはり注目すべきは、これらが紙による提出を選択する理由ではなく、パソコン・スマートフォンによる提出を避けるためのものであるとい

うことだろう。つまりそれは、ここに指摘されたような問題さえクリアされれば、コメント回収においてスマートフォンを活用することに障害はないということを示すこととなる。ただし既に記した、学生の私物を利用するということに引っかかりがあることは事実である。全員にタブレットなどの端末を配り、Wi-Fi接続で行うというのが理想的ではあるが、現状ではなかなか難しいかもしれない。この問題は残るとしても、スマートフォンの活用に一応問題がないとなれば、次に考えられるのはデジタルデータとしての回収が授業運営において、あるいは学生の学習環境において紙の回収に勝るか否かの問題となる。

まずは紙による提出であることのメリット、パソコンやスマートフォンによるコメントの回収では実現が難しいこととは何かを考えてみたい。

デジタル的な回収であれば当然、中身はテキストに特化される。文字のみによる意見表明に限られてしまうのだ。紙であれば絵で表現することも、図式によって考えをまとめることもできる。もちろんそれは個人個人のノートにでも記入させれば済むことでもあるが、学生が言語化できなかったものが教員に届けられることも意味のあることではあろう。もしそれを翌週の教室全体で共有しようとした場合、担当教員は当然の如く、図式化されたもの、絵画的に表現されたものを言語化しなければならない。ここでは担当教員の技量が問われる訳だが、もしここで教員側がそれを適切に理解し適切に言語化できたならば、当該学生はもちろんのこと、他の学生にとっても大いに意味のあるものとなるに違いない。言語化が困難であったものが言語化されることは学問の本質と言っても過言ではない。上手くいったならばではあるが、これは紙による提出であることの大きなメリットである。それ故にアンケートの選択肢の中に「箇条書き・イラスト・表など、形を決められずに自由に記入することが出来るから」との項目を設定したのだが、希にこのような理想的な状況がかつてありはしたものの、ただしこれはアンケート結果として学生の支持を得られてはいない。学生にとって少し想像しにくいものであっただろうか。

## 7. コメント紹介の構成と授業各回の有機的接続

さて、ここよりは問題を真正面に据え、データであること、データベース的使用することができるということ、そこにおける最大のメリットとは何かを考えてみたい。電子辞書にできて書籍としての辞書にはできないことと考えたならば「検索」という操作にすぐに辿り着くかもしれないが、データが回収されたコメントであるならば、それは大したメリットとは言えない。後にピンポイントでコメントを検索することなど、まずはあり得ないからだ。むしろ電子辞書のような形態ではなく、図2のようにスプレッドシート上にそれぞれのレコードが並んでいる状態を考えたならば、いわゆるデータベースであることが持つ利点が明らかとなりはしまいか。既に少々触れた並べ替えと抽出、データであることの最大のメリットはこれであると言えるだろう。

学生に依頼したアンケート結果からも明白なように、演習タイプの授業でのコメント回収はデータであろうが紙であろうが、あまり意味のあるものとはならない。そこには既に記したように、演習という括りであることの性質上、ほとんどの問題は授業の中で解消し得るからであろうが、もう一点重要であるのは人数の問題と思われる。多くて40人、少なければ10人を下回る人数は物理的にも精神的にも、良くも悪くも学生と教員の距離は近くならざるを得ない。学生の細かい部分を観察することも可能であろうし、声を掛けることも容易だ。学生からも声を掛けやすい。翻って100人、多ければ400人に達するような大教室を利用する教養の授業でこれは不可能に近い。学生から担当教員に話しかけることも難しいだろう。担当教員から学生へ声を掛けることも、学生の日常を考えながら慎重に行う必要があるように思う。いつの時代であっても、集団の中で目立つことを避けようとする意志の働くことは当然でもある。

結果、例えば私自身も担当する教養科目としての「文学」などでは、学生1人1人の表情を掴み取ることは難しくなってしまう。そこでコメントを求めるということになるのだが、半期15回のコメントを個人データとし

て並べられることは、1人の学生を理解する上でこの上ないメリットと言えるだろう。3ヶ月の間にどの様な変化を遂げたのか、これが一目瞭然だ。もちろんそれは紙によるコメント回収でも可能ではあるが、そうなる回収した用紙を個人別に並べることとなる。毎週この作業を行うことは大変な労力であり、仮に行ったとしても、必要あってもう一度名簿順に並べ直すことなど、不可能と言っても過言ではない。15回を通した1人の学生の変化であれば「大福帳」と言われるような、すべてのコメントを1枚の用紙に記させ、学生と教員との間でそれを15回やりとりするような形式でも可能ではあるが、これもまた100人を超える状況であれば現実的とは言い難い。大人数の中で個人を捉えるためには矢張りデータである必要があるようだ。

さて、これは担当教員にとっての学生1人1人に対する効果と言えるだろうが、「並べ換え」や「抽出」というデータベースとしてのメリットを考えた時、教室全体に及ぶ効果、1回1回の授業をそれぞれ有機的に接続し得るという効果を指摘できるのではないだろうか。

回収されたコメントより、多い時で6つほどを取り上げて翌週の授業の冒頭にて紹介する。当然それは前週の内容がどの様なものであったのかを振り返ることとなるのだが、これらピックアップされたコメントが的確な構成をもって並べられたなら、2週にわたる内容を有機的に接続することとなる訳だ。今週の話へはスムーズに入ってゆけることとなる。

冒頭に述べたが、非専門科目であるところの教養系科目では出席者がその学問を専門とする学生ではないため、同時に目的が明瞭なものとは異なり、担当者個人の力量の中で複雑に設定された目的がある為、出席者側で15回の授業を有機的に接続させることは難しい。もちろんこれはどんな授業であっても同様だが、例えば「文学理論」の授業であれば文学研究における〈理論〉を理解するという判りやすい目的がある。そうであるなら個人差こそあれ、学生にとって15回の流れを意識することはそれほど難しいことではあるまい。対照的に教養系の科目はそれが難しい。

たとえば2017年秋学期、私の担当した教養科目の「文学」ではスペイン文学を取り上げた。しかもセルバンテスやロルカといったところではなく、フランシスコ・アヤラという、おそらく日本ではマイナーな作家であった。新聞の書評欄で偶然見つけた作家を取り上げることにしたのだが、何も取り立ててスペイン作家を取り上げたかったという訳ではない。彼の作品を通して自らを見つめるということ、自己客観視・自己相対化とは何か、それを考えてみたかったのだ。詳細は省くが、その為に話は映画「STAR WARS」から始めてスペインの近現代史、イスラム文化の紹介と進み、アヤラの著作を考え、最終的には原民喜の小説「夏の花」について考えていった。このように並べてみると何が何やら判らないが、私の頭の中ではすべてが〈自己相対化〉という一点で繋がっている。しかし、これを学生側に投げ出す形で意識させることは難しいだろう。教養の「文学」という枠組みであるからこそできること、だからこそ広がってしまう目標設定。

だから常に担当教員の側から、その授業が何を目指しているのかを意識させるよう、より丁寧な工夫する必要がある。その為には毎時間、前回との繋がりを解説することが有効だろう。相対化してみることの重要性、単なる作家・作品の紹介ではなく、それがきちんと伝わっているのかどうか。しかし、これを教員側から一方的に行ってしまうのは、殊に授業開始の際に行ってしまうのは、学生は単なる導入として聞き流してしまう可能性が高い。

同じく出席している学生の意見であること、これは学生にとって非常に重要なことのように思う。集められたコメントの中に、紹介したコメントに対するコメントをよく見かけることからそれは明かだろう。あれほどに的確な意見や質問をすることは自分にはできない、そんなことを直接言うてくる学生も少なくはない。教室全体に紹介するという事を含めたならば、これを単なるコメントの回収を超えたところの「アクティブラーニング」と言っても良いのかもしれない。ともかくも学生の中で、そういった集中力をもって受け取られるコメントを通して前回との繋がりを的確に示すこ

とができれば、これにまさる授業の導入はあるまい。そしてそれを行うには、提出されたコメントを如何に有効な配列とするかが問われる筈だ。それに役立つものこそ、コメントをデータで回収するという方法なのではないか。

## 8. おわりに——教養科目におけるコメント回収の重要性

加藤周一が世を去ったのは2008年であったが、その少し前に東京経済大学に招かれて講演をしている。その企画から発展して出版された本の中、インタビューの形で以下のように語っている。

少数意見の尊重ということをおぼえない限り、そして、現在の議会でも、多数党がわれわれが多数党なんだから言うことを聞け、と言っている限り、この国は同じことを続けると思います。もし、方向転換の必要が生じたら、また同じことになるのではないか、また滅亡するのではないか、そんな感じが非常に強くするわけです。  
(中略)

教育もまったくそのとおり。同じことをみんなに教える。少数意見というのを習う機会が学校の中にはない。教師の言うことが正しいと言っている。教師の言っていることは一つの意見だというようにはならない。一番大事なことは学校で習わない。反民主主義教育です。<sup>7)</sup>

ここに述べられたのは教養教育の重要性、リベラル・アーツこそが知性を養うといった指摘だ。極めて重要なことであると思う。そしてこれは同時に極めて文学的な思考法であるとも言えるかもしれない。文学とは100人中99人が賛同できる道德の問題でも、99人が幸福となれる政治の問題で

---

7) 加藤周一／徐京植（聞き手）（2005：P98-99）

もないからだ。1人の違和感、1人の叛逆、それをすくい上げるのが文学であるならば、多数決とは対極にあるものと位置付け得よう。そういった、すなわち加藤周一のいうところのものを実践することが最も困難であるのは恐らく、100人を越える学生が教室に入る教養系の科目ではあるまいか。「教師の言うことが正しい」とならないために必要な教養を身につける為の科目は、出席人数を含めた授業の形式上「教師の言うことが正しい」というスタイルになりがちなのだ。

そうならないためには出席している学生のことばに真摯に耳を傾けること、これが重要であるように思う。教員の言うことを単なる〈正解〉として受け取ってはいないか、自分の話は独善的なものとなっていないか。常なる内省がより求められている。

そう考えたとき、大人数であっても出席者1人1人を認識し、加えて非専門であるが故に毎回の授業に関連性を見出しにくい学生の中に15回の授業の有機的な接合を生じさせ、なおかつ担当教員の無駄な労力を削ることができるのは、データとして並べ換え可能なコメントの回収であろう。

先に取り上げたアンケート結果を見れば、少なくとも学生自身は演習の授業でのコメント提出作業を重要とは思っていない。おそらくそれは正しいだろう。もう一步踏み込めば、出席人数に関わらず、専門の授業ではそれほど必要なものではないのかもしれない。そこまで言うことは今回の考察では難しいが、少なくとも初年次教育として設置されることが多い大人数の教養科目においてコメントの回収は重要なものであり、なおかつそれを徹底的に活かすのであれば、紙による回収ではなくデータによる回収、より正確に言えば担当教員の手元にデータベースのような形で残っていることが重要なのではないだろうか。

出欠調査を兼ねた場合に求められる厳密さ、学生の私物であるスマートフォンを使用してしまうということの問題点、出欠を含めた学生のパーソナルデータがオンライン上に保存されてしまっていることへの危惧——ただしこれはUSBフラッシュメモリなどで物理的に持ち出し、それを喪失し



てしまうことへの危惧と比較すれば、かえってデータ流出の恐れは低下するとも考えられる——、解決すべき問題は多々あろうが、フォームを用いたコメント回収にはそれらを補って余りあるほどのメリットが認められるのではないだろうか。検索・抽出・並べ換え、これが可能な〈データ〉であることが大学の授業におけるPDCAサイクル——Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Action（改善）——の運用に役立つことは明白であろう。しかし、授業計画を練り、実行したものを学生に評価させ、それを改善点へと繋げてゆく、授業にあってこれを目的とってしまうのは意味がない。重要であるのはあくまでもその学問の奥深さ・面白さを伝えること。そうであるなら、フォームへの入力によってコメントを集める、つまり無駄な労力を割かないようにするこの方法が、異なるPDCA——Plan（計画）・Delay（遅延）・Cancel（中止）・Apology（謝罪）——とならない為の一助となると言えるのではないだろうか。

## 参考文献

- 須田昂宏「リアクションペーパーの記述内容に基づく学生の学びの可視化—大学授業の実態把握のために—」『日本教育工学会論文誌』（2017年2月、日本教育工学会）
- 織田揮準「大福帳による授業改善の試み—大福帳効果の分析—」（『三重大学教育学部研究紀要教育科学』1991年3月、三重大学教育学部）
- 大平健『やさしさの精神病理』（1995年9月、岩波新書）
- 加藤周一／徐京植（聞き手）「教育に何ができるか」（加藤周一／ノーマ・フィールド／徐京植『東京経済大学21世紀教養プログラム発足記念講演会教養の再生のために危機の時代の想像力』2005年2月、影書房）
- 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014年9月、東信堂）
- 絹川正吉ほか「特集 教養教育の充実と発展」（『大学時報』2004年7月、日本私立大学連盟）

